新宿

一千の顔を持つ新宿

いま、新宿は大きく変わりつつある、という馬鹿な書き出しをもって原稿を書き始めることをお許しください。

ともかく、新宿は、私が生まれてこの方、見てきた限り、いつでも大きく変貌しつつある街であったのだ。

どこからどこに向かって、あるいはどのような方向性を持って変貌しつつあるのかについては、色々と意見の別れるところだろうが、この街が、とにもかくにも変貌しつつある街であるという点については、ほとんどの人々が賛成してくれると思う。

たとえば、中学生の頃まで、私にとって、新宿は単にデパートの街であったが、高校生になると、ここはロック喫茶の集まるシンナーの匂いのする街に変貌した。そして、大学生の私にはもう少し野蛮な顔を見せ、30を過ぎてからこっち、新宿は、なんだかわけのわからない街になってしまっている。

これは、新宿の変貌というよりも、むしろ私の変貌(堕落と言い替えてもよろしい)を物語っているのかもしれないが、ともかく新宿は、一千の顔を持っているのだ。

新宿は、ショッピング街であり、交通の要衝であり、歓楽街であり、犯罪の温床であり、そして、意外なことに、住宅街でもある。さらにこの街は、未来と過去とを同時に体現し、先端と末端の両方に属し、日常と非日常の境界の上に立っている。

こうした多様さが、常に変貌しつつあるのであるから、この街を一言で要約することはほとんど不可能に近い。

「新宿というのはどんな街なのですか」

「あらゆる街です」

もちろん、こんなセリフは要約にも何にもなっていないし、質問に対する答にさえなっていない。しかし、あえて一言で要約するなら、「あらゆる街」とでも言うほかはない。

あるいは、新宿は私なのだと言っても良い。誤解してもらっては困る。

私は「新宿はオダジマなのであり、オレが新宿なのだ」みたいな誇大妄想を述べようとしているのではない。ここで言う「私」とは、「新宿に来ている当人」という意味だ。

つまり、新宿は、そこに集まるあらゆる人間たちに対して、ひとつの鏡を提供する街なのである。

たとえば、2丁目に集まる連中は、2丁目こそが新宿だと考えているが、その実、そいつそのものが2丁目タイプであるということに過ぎないのであり、アルタをして新宿だと理解している女子高生は、要するにアルタ止まりの女ってことなのである。

であるから、新宿を語ることは、往々にして、自分自身を語ることになってしまう。

「いやあ、あそこは、助平な街だよ、実際」なんて調子で新宿の話をしているつもりでいるこの男は、結局、自分が新宿という街で、もっぱら助平なことしかしてこなかったということをうっかり告白してしまっているのである。くわばら、くわばら、である。

シーラカンスと三葉虫

かように、新宿は、多様だ。だから、たとえば何人かで「よーし、新宿で呑もうぜ」となった時には、絶対に話がまとまらない。ひとつの街にあらゆるタイプの飲み屋が揃っているというのは、ちょっと考えると有り難いことのようでもあるが、実は、困ったことなのだ。

「おいおい、〈北の家族〉ってのは勘弁してくれよな」

「なんだか、この辺の店は演劇青年あたりがとぐろ巻いてそうで嫌だな」

「じゃあ、適当な焼き鳥屋でいいよ」

「オレはヤだね」

「そうだよ、わけのわかんないおっさんにからまれるぜ」

「じゃ何か?ガキの集まる店へ行けってのか」

「カラオケ行こうぜ、カラオケ」

「一人で行けよ」

と、一向に話が進展しないのである。

それでも、まあ、飲み屋をめぐる仲間うちのもめごとなんてものは、酒を呑む前の手続きみたいなもので、深刻な問題ではない。

本当に困るのは、初対面の人間と新宿で呑むことになった、というシチュエーションだ。

「どんな店がお好みですか」

「いや、あの、カラオケ以外なら何でも」

「女性のいる店なんかは」

「いや、ボクはそっちの方はいたって無重宝でありまして」

酒の呑み方には、その人間の品性が全部出てしまうなどと、つまらないことを信じている私は、こういう場合、どう返事をして良いのやらわからない。ワンショットのカウンターバーが好きだなんて言うと何だか気取ってるみたいだし、初対面からいきなりいざキャバクラというのも大人気ない。

で、まあ、おまかせしますということで、その辺の適当な店に連れて行かれる事になるのわけなのだが、この手の経験が多かったこの2年ほどの間に、私は新宿という街が一種のタイムマシンであることを知った。

たとえばゴールデン街という場所には、昭和40年代というものが、ほとんど当時そのままの形で冷凍保存されている。

半年ほど前、私はある人に引率されて、ゴールデン街の、せいぜい5人しか座れないカウンターの店に行った。2階に上がって、私は、うひゃあと言わなければならなかった。そこは、8畳ほどの畳の部屋で、ガスストーブと折り畳み式の卓袱台ある学生下宿のような部屋だった。で、壁には唐十郎と寺山修二の演劇のポスターに「日帝打倒」の落書き、でもって、ボトルはホワイトで、水は水道から直接汲んでくれ、である。

そしてまた、このあたりの店に集まる人間も、当然の事ながら、当時の人々で、話題は当時の話題で、歌も当時の歌である。うひゃあである。これは、断じて、誰が何と言おうと、うひゃあである。シーラカンスと三葉虫が、ウミユリを脇にサントリーホワイトを呑んでいるのを見かけたら、だれだってうひゃあと言うに決まっている。

このほか、ミラノ座周辺には、実は昭和50年代が保存されていることを私は知っている。たとえば、カンタベリーハウス・ビバ館に行ってみたまえ。あそこでは、きちんと今でも、絶対にウイスキーではないあやかしの酒を出してくれるし、タイトスカートのズベ公さえ見かける事ができる。ビンゴ・イン・ミラノに足を伸ばせば、そこでは、当時そのままの服装のインストラクターがリレー回路でできた20年モノのビンゴマシンを調整している。これは、本当の話だ。

それ以前の時代がどこに保存されているのかは、私にはしかとはわからない。しかし、どうやら2丁目方面には昭和30年代の歌声バブが生き残っているようだし、西口ガード周辺には戦後のヤミ市酒場とおぼしきものがある。

ところで、最近、私は、新宿にほとんど顔を出さなくなった。わざわざ電車に乗って呑みにも行く気もしなくなったし、買い物も近所で済ましている。理由は分かっている。たぶん、結婚したからだ。

仮に、この先、夜毎新宿に繰り出すような日々がもう一度やってくるのだとしたら、それは、私が結婚生活に不満を抱くようになった時のことだと思う。特に根拠があるわけではないが、家庭的な幸福の中にいる人間は、あまり新宿には行かないような気がするのだ。

こんな話をすると

「へえー、オダジマさんも、案外愛妻家でいらっしゃるんですねえ」

なんて調子で、私をからかおうとする奴が出てくるだろうが、夜毎新宿に繰り出しているのは、そういう奴なのだ。

CITY

山手線膝栗毛

テクニカルライター
小田嶋 隆

新宿を一言で要約することは不可能に近い。
それを一言で要約するなら
「あらゆる街」というほかはないが・・・。

Illustration. Takeuchi Kazuya